

ファブラン

増子カ

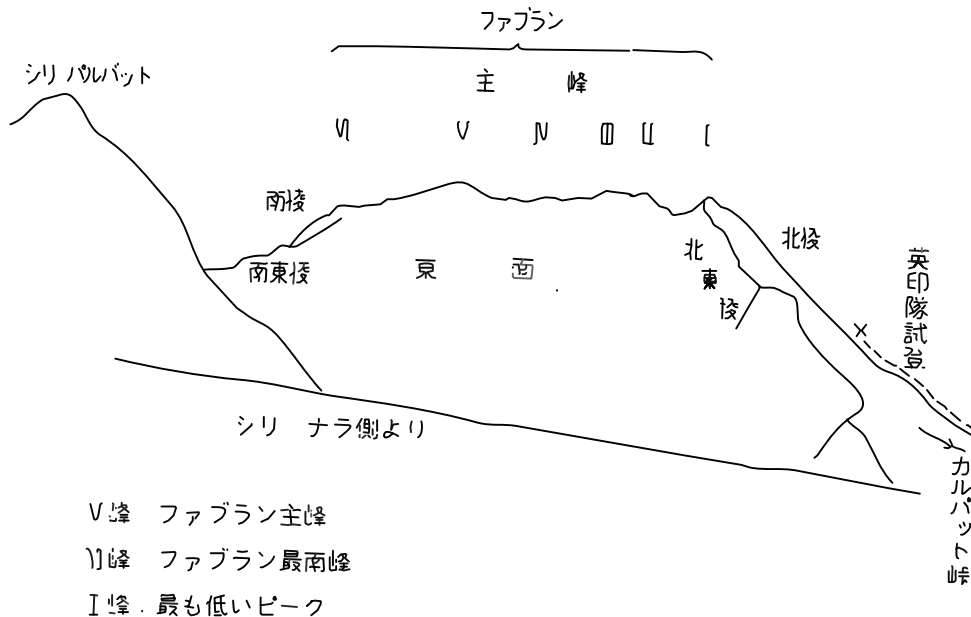
ベースキャンプを移す

半月も登山活動を展開して来た無名峰(6109m)を断念し、とても居心地の良いベースキャンプを徹収するのは、とても残念だった。しかし新しい目標が出来て、隊員の顔は一瞬暗かったが、登山には忠実かつ貪欲な我々の目の奥は次の山を目指して輝いていた。10月2日半日のドンキーによるキャラバンを終えて、ナンガール部落の近くのシリナラがティロットナラに押しだした扇状地にキャンプを張った。

このシリナラはシェルパのワンギャルがアメリカ隊と一度トレースしており、我々としても見通しは明るく考えていた。夕方隊員2名でシリナラを偵察に行ったが、水量は少なく、珍しや透き通った水流だった。上流で二股になっており、両方とも100m近くの滝をかけていた。ルートは真中のバットレス状の草付を登る事になるだろうが、相当なアルバイトである事を予想した割には、翌日ポーター11名と隊員2名とワンギャルでBCの荷上げを行ったが、ちょっとした岩場があるが、夏の間羊飼いが通るらしく、結構足場がしっかりしており、何なくアメリカ隊がアドバンスベースとして使用したBC予定地に着いた。とても見晴しの良い中腹の台地で、高度4150mで水の便も良く、おまけに石で作った羊小屋迄あり申し分のない所であるが、一つ残念な事は土のほとんどが羊の糞であり、ふわふわしてテントの中がいつも汚れる事だった。我々が空身同然で両手を使って登って来た岩場を羊が登降するのには、びっくりしてしまった。

偵察

翌日先発隊3名はさらに上部の偵察に出かけた。BCからすぐ上が70~80m岩場になっており、あとは急なガレを登りつめると、岩のいたる所が氷河によって削れた跡がたくさん見られるカールになっており、その上に氷河の末端がのしかかっていた。この辺迄来たら雪がばらついて来たので、だいたいC1予定地に目やすをつけて引きかえした。BCに着いたら下方より後発が登って来た。早速翌日から荷上げを開始すると同時に、10月10日迄の登山期間しか許可されていなかったのも、延長願を山麓の



村人をとおして依頼しておいた。10月6日朝起きて見ると10cm位の積雪があった。まだ降り続けている中をC1へ荷上げを行いC1(4800m)を建設した。翌日も又雪が降り結局C1では30cm近く新雪が積ってしまい、動きがとれず休日となってしまった。

シェルパの話によると、このまま冬のモンスーンに入ってしまう等と言いだし、隊員全員がヒマラヤ一年生であるために、かなり動揺していた。その上にリエゾンのシャルマ氏もこれ以上雪が積ると、ポーターもB・Cに登ってこれず、ロータンプスも閉鎖されるだろうから、登山に終止符を打ったらどうか等々と言出す始末である。我々は登山期間延長の返答もまだ無く、悪天候といまだにピークを一つもアタックせざ、悪条件であったが、10月8日雲一つない快晴に恵まれたので、これはチャンスとばかり、C2への偵察に出かけた。無名峰と同じくB・Cから目的の山は見えず、ファブランはC1迄来ても皆目見当がつかなかった。左のガレを登り、氷河の平原とも

れは日数と天候さえ恵まれれば登れると思えば思う程くやしかった。翌日快晴だったが、登山期間延長の返答を待ってつらい停滞を強いられた。

荷 上 げ

10月10日、やっと登山期間が10月25日迄の延長の許可が出たので、早速シリパスよりシリパルバットの基部へ氷河の平原をラッセルしながらC2予定地(5200m)へ荷上げし、デポして来た。翌日は隊員4名にワンギャルを含めて5名で荷上げし、C2を建設した。あまりラッセルがひどいので、時間が許す限りC3への若干の荷上げを兼ねてラッセルに3名で行ったが、ひざから股位の雪であるが、なかなかきついラッセルだった。夕食後アタックについての討議がなされ、その結果井口、増子がアタック隊員に決定し、明日残り3人がサポートしてC3を建設し、10月13日アタックの計画であり、日数の関係により2名だけのアタックと決定した。10月12日アタック隊員は、個人装備だけに軽量化され、深いラッセルは終始大嶽隊長がラッセルし、那須、ワンギャルが装備、食糧の重荷を背負いながらも、アタック隊員を絶対前に出さなかった。ルートはシリパルバットの基部を500~600mトラバースし、そしてファプランとシリパルバットの間奥深く入りこんでいる氷河をさらに登りつめて、シリパルバットからファプランへ連らなっている稜線より落ちている急な雪壁をフィックスしながら直上した。左側はビルディングが重ったような、いまにも崩壊しそうな懸垂氷河があり、ボリューウムのある腰迄のラッセルにはまいてしまった。全て崩した雪は下



でデルタを形取っていた。この急な雪壁を越えると、いくらか緩やかになり、懸垂氷河の凹地にC3(5600m)を建設し、かつその間に井口、増子は稜線迄のフィックス作業を始めて。C3から雪庇を崩して稜線に這い出た。今日迄の不安が全て消え、新たなファイトが湧き、じっくりとファプランへ連っている稜線、明日のルートをじっくりと頭にたたきこんだ。もうその頃は西の方が真赤になり太陽がすでに沈んでいた。C3を見たら、もうすでにサポート

隊によりC3のツェルトが張られ、下山を始めていた。スノーバーを深く打ちこみC3へ戻った。

夕食をとりながら井口さんと二人でアタックの打合せをしながら、シュラフにもぐった。下から見上げたシリパルバットよりファプランへの稜線は真平に見えたが、意外とギャップが多く、かなりの距離がある事、そして急な雪壁一ヶ所とニヶ所の岩峰が巻けるかどうか不安はあったが、互いに登頂可能である事を確め合い静かな夜に身をあずけた。夜中に寝返りをする度に首にテント内に張りつめたシャーベットが落ちて来て、目をさましたがよく寝たようだ。

登 頂

井 口 邦 利

シリ・パルバットの頂から一気に氷河へ落ちている急な雪壁の上部に懸垂氷河のずたに恰好な雪の台地がある。昨日大嶽と那頂とワンギアルで我々をサポートしながら設営した最終キャンプ、とは言っても2日間の食糧、必要最少限の装備だけのツェルトで目覚めた。あたりはまだ真暗である。どうやら寝すごしはしなかったらしい。これまで毎日明るくなってからの起床だったから少しばかり心配だった。

やはり登頂の張りつめた感じを持っていたのかも知れない。

ツェルトのすぐ上は南向きに稜線があるからツェルトに陽はささない。時計を見ると4時だ。

内側には真白に息から出た水蒸気が氷の結晶の花を咲かせている。

コンロをつけるとツェルトの中は俄かに明るくなった。食べ慣れたおじやを作って腹に流し込む、食事は簡単なものだ。

タバコをふかして明るくなるのを待っていて、ローソクを消したら意外ともう外は白んでいた。靴をはいて外へ出る。

「ピーン」と澄んだ空気が凍ってしまいそうなキリッとした朝だ。

空はまだブルーブラックのインクのような冷たさを含んだ色だが、あと小一時間もすると太陽の暖かさを確実に運んでくる一点の雲もない空だ。

何んてかホッとして靴にアイゼンをセットする。

増子がトップで一歩を踏みだす。6時30分だ。

すぐきのうフィックスしておいた稜線への壁を上る。上ると向う側の氷河へ斜面はすーっと落ちている。その下は岩を混えて一気にうす汚れたモレーンを乗せた氷河へ落ち込んでいる。スリップしたらあっちこちの岩に当たってバウンドして下までアッと言う間だな、と思いながらやせた稜線を歩き出す。



小さなうねりをいくつも従えて尾根はほぼ水平にしばらく続く。

2 - 3 個目のコブを上ると初めて岩が顔を出した下りになっていた。上に雪がかぶっている。腰を低くして足をさらわれないように下る。

これから登る尾根の全貌は下で常に見えていたが、思ったよ

りずっと小さなコブが多い。目していた雪のギャップまで予想外の時間がかかってしまった。右は雪庇でルートは全部左斜面ばかりで、上にパウダースノーがおおっているからすこぶる気味が悪い。うかつに足を置くと、スーツと流されてしまいそうになる。ここまではほぼコンティニュアスでくる。2ピッチほどのこの雪壁は幸い雪がしまっている。

増子がまずアイスメス代用のアイスハーケンをにぎって取りつく、しばらくは2 - 3歩ごとにステップを切っていたが、そんなことをしていたら疲れるし、時間がかかって仕方がないと見て、一気に10歩くらい駆け上ってわずかなホールドを切るようになった。アイスハーケンの代用アイスメスの偉力は抜群である。これ一つで安心感が大部違う。私は後ろから所々にステップが置けるようにしながら上る。ほぼ直上して7mほどの壁である。左手へぬけて、また稜線に歩を進める。

コンティニュアスを混えて5 - 6ピッチ単調な雪稜が続くと稜線は急にやせて岩の上ののった雪庇のような上を四つんばいになって4 - 5歩進んで左手の岩へ移った。

ここから誰かの言った「ゴジラの背」が始まる。水平距離にして200mほどの岩稜地帯である。途中にニケ所の顕著な岩降がある。始めの岩降は基部の右側を斜め上に上るスラブ状の岩が5 - 6mあって雪がのっている。いくらステップを切ってもサラ、サラと空しくくずれるだけで一向に上へ上らない。左手にジッヘルポイントのハーケンを、一本、二本と打込んですり上る。2mほどの岩の凹部を上って浮石の多い雪とのミックした急な斜面を上ると第一の岩降は巻き終る。

やせた雪稜をたどると2ピッチで第二の岩峰下へ出た。ここは取付が小さな岩の門のようになっていて稜線上からこの門をすりぬけて左手に出、やや下り気味に岩峰の基部を振られそうになりながらハーケン2本でトラバースを終る。そこから浮石だら

けの岩を3～4m上ると第2の岩峰の巻終り点に出た。ザイルは曲りくねってなかなかすべってくれない。

ここで時計を見たらもう昼近くを指していた。あとは単調な雪壁を上ればいだけだがいままではほとんど高度は稼いでいないから、まだまだこれからが体力の勝負どころだ。

この岩を巻いてからほんの5mほどは両側が完全に切れ落ちていて浮石の上に雪がのっけていて、そのすぐ先は小さな雪庇の真上を歩かなければならない。そろそろと渡ってやっと平らな所へ出た。

この頃から井口はせきが激しく出るようになって、せきのために顔面を赤くさせながら歩く、岩と雪のミックスした斜面を3ピッチでぬけると後は急な雪壁が南峰までつき上げている。この尾根はこのあたりで消滅してしまいあとは急な山肌を直上するかっこうになる。この雪壁を5～6ピッチでぬけて、小さな岩がでていところで増子に声をかけて2人がそろろう。この斜面で唯一の2人がステップを切らずに立てるところだ。8ミリカメラを出す。

増子が「井口さんどうぞ」という。もう頂上はすぐ上なのだ。「バカ増子行け！」と言ったら「イヤ、先にどうぞ！」という、僕はパテパテでせきは出るし、半分増子に引っぱり上げられたようなもんだから、おがんで増子にトップを行ってもらった。

8ミリがジーッと快よい音を立てて増子の姿を追う。最後の斜面を上って頂上稜線へ出た。逆光で増子の真後ろの太陽が時折ギラギラとレンズを通して目にとび込んでくる。8ミリは快調に動いている。ピッケルに結んだ旗がなかなかとけない。

しばらくしてピッケルを振る増子の姿がこっちを向いた。次いで私が上る。14時5分だ。

カルパット側へ足もとが見えないほどスパッと切れ落ちているのを、こわごわと足もと見たさにのぞき込む、周りは360度一点の雲もない眺望だ。

トランシーバーのスイッチを入れたら下山のサポートに来た太嶽が頂度ワンギャルとシリバルバットの頂上にいる所だった。

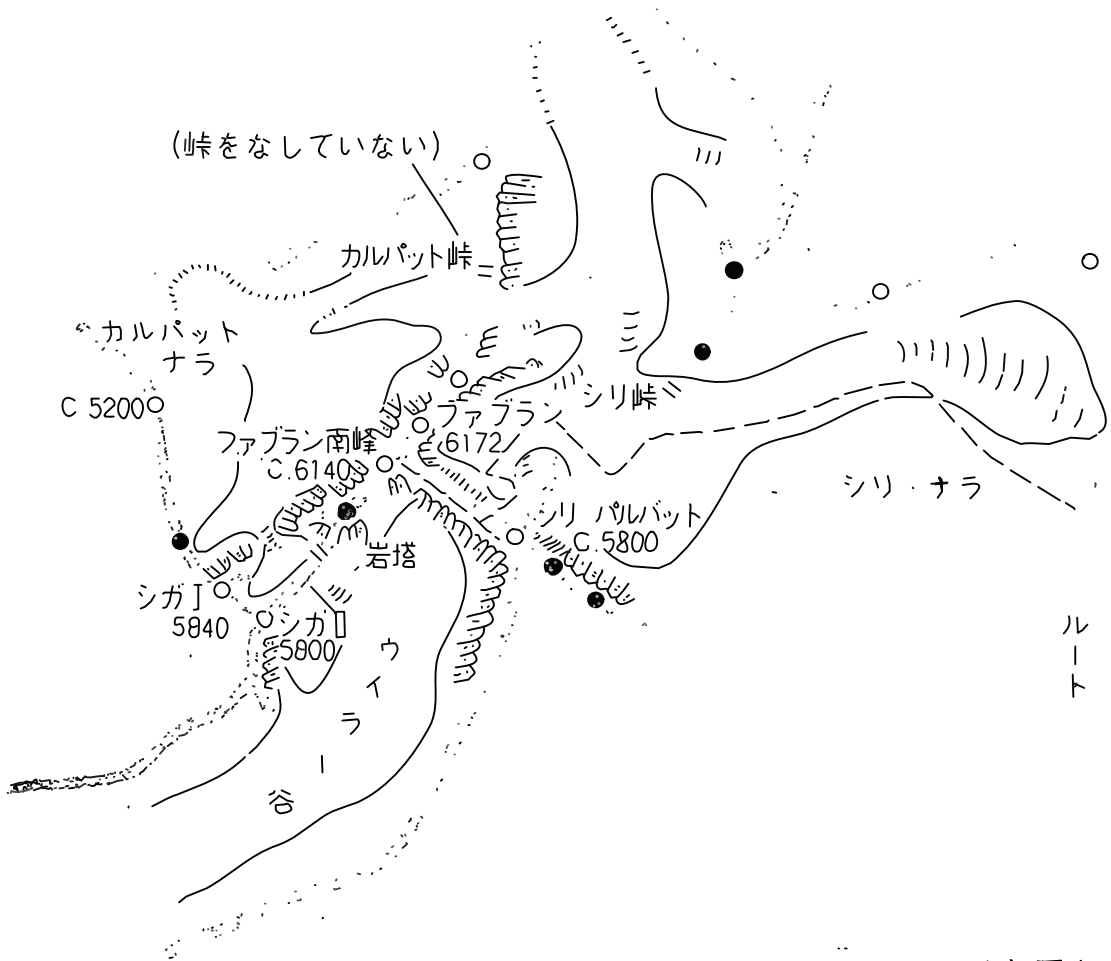
「頂上へ立った」と言ったら「バカモン！そこは南峰だ！主峰はもっと右だ」という返事が返って来た。「もうパテパテだからカンベンしてくれ！」ということで下山と決める。

大嶽たちのいるシリバルバットの頂上雪田に黒い点がわずかに肉眼でも見ることができる。ストラップが外れてカメラを氷河へ落してしまったから、そっちから写真を撮ってくれというので、ピークツーピークの登頂写真を撮るという変なことになっ

てしまった。

下降はもっと時間がかかるかも知れない。登って来たところを見下したら正にスベリ台という感じで氷河まで一気に落ち込んでいた。

20分ほどの時間があったという間に去ぎて、360度のパノラマを撮ってから下降を開始する。安全をとって斜面に向って下降するが、遅々として歩がはかどらない。何ん



実際のファブラン周辺地形 と登山ルート

べんとなく前を向いて駆けて下りたい衝動にかられた。

例の2ピッチの雪壁の上で時計は18時を指していた。西の空に最後の明りが空を赤く染めている。あとは暗くなる一方だと思うと、ほの暗いたそがれは哀愁を帯びて胸

にせまって来る。

下りは往路に作ったステップがかえってじゃまに思えて来る。ゆっくりと一番前のツアックで右手にピッケル、左手にスノーバーで調子を取りながら下りた方がよほど楽だ。2人が基部へ下りた時は、もうヘッドランプを出さなければならないほどになっていた。

単調な雪稜だが、同じようなうねりが重なって、どこらあたりを歩いているのかさっぱり判らない。早くテントへ着きたいと思うが、あたりは真暗でも天気は相変わらず安定を保っているから安心して行動していることができる。増子はしきりに寒いと言っている。私も歯があまり合わないが身体は寒さを感じていない。

やっと見憶えのあるピークを越えたら下降点であった。20メートルばかりのフィックスにぶらさがるようにしてツェルトの最終キャンプへ着いた。

時計を見ると頂度20時だった。さっそくトランシーバーにスイッチを入れて下のキャンプを呼ぶと、すぐに応答あり、帰幕を告げる。

明日は途中までサポートに来るとの返事であった。我々は外が明るくなったら起きると告げてツェルトへ入った。

靴をぬごうと思ったら皮がコチン、コチンに凍って全々ぬげない。無理に脱いたら靴下ごととれてしまった。これで足に寒さを感じなかったのだから不思議だ。

朝出発してからこの日は、ピーク以外休まず、何も食べていないのに全く食欲なし、すぐに寝袋へもぐり込みたかった。増子は少し何か食べたいと言って、スープが何かを作ってから寝についた。やれこれで終わったと思ったらすぐに眠り込んでしまった。

思えば長い道のりだった。3年の月日を経て...、にしてはあまりにもあっけない幕切れだった。しかし僕はピークに隠れていた向う側の山波が見えたことが無性にうれしかった。

翌朝、ゆっくり寝ているつもりが意外と早く目ざめてしまった、

起きてしまったら、ツェルトの中でゴロゴロしているのもばかばかしくなってきた。外でトカゲと言っても、いくら天気が良くても、ここは最終キャンプ、下の方が暖かいに決っている。そう思ったら、すぐ下山することに決めてしまった。

不用な食糧だけ残して下ることにした。スノーバーはいま3本だけしかない。なんとか記念に持って帰りたいと、増子はこれから下るフィックスの最上部の支点をぬいてしまった。だが途中にもう一本あるから下降にさしさわりはない。

急な雪壁を下り終って氷河の底へ着いたら、大嶽と那須が迎えに上って来ていた。

彼らに荷をもってもらってC2へ急いだ。



ヒマラヤのヒンディー文字